



岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内
岐阜県博物館協会

TEL 0575-28-3111

振替名古屋637909

これからの博物館活動

岐阜県博物館協会副会長

岐阜県博物館館長

遠藤祐神



岐阜県博物館協会は昭和41年6月に設立され、機関紙「岐阜の博物館」は45年1月に第1号が発刊されております。

この機関紙第1号の中の「博物館運動は単

に古いもののみにとらわれることなく、新しい息吹に目覚め、自然科学、人文科学の両面をも取り入れて人類文化の発展に寄与すべきものである」というスローガンのもとに、多くの館園は地域文化の向上の場として、地域に根づいて発展してまいりました。

平成11年度の協会加入館園は、139で、個人会員は23名になり、近年、町づくり、村づくりの一環として多くの館園が建設されてきたことは、協会としても大変喜ばしいことであります。今年度も協会では主な事業として、機関紙を年4回発行し、公開講座年4回、会員研修会年3回の開催を計画しております。

さて、平成11年度のイコム (ICOM) 日本委員会役員会ならびに総会が、5月25日に国立科学博物館で開かれ、会員増強の促進、諸会議への参加、情報の提供などが議題になりました。その中で、1977年のICOM第12回総会において、「博物館は文化交流を促し、文化を豊かにし、人々の相互理解・協力・平和を育む大切な機関である」というスローガンの精神に基づき、毎年5月18日に世界博物館記念日を祝う事を制定しました。また、1997年の会議において、世界中のあらゆるタイプの博物館が利用できるように、テーマを「発見のよろこび」と決定しました。国ごとに慣

習や条件の違いがありますが、日本でも5月18日頃にイベントを計画してはどうかという意見が出されました。ドイツでは、博物館デーを作って、博物館ツアーを実施しているとのこと。

これからの社会は科学技術の高度化、高度情報化、国際化、高齢化、環境問題などで急激に変化していくと思われまます。博物館におきましても、人々の興味や関心、ニーズなどの変化の流れを明確にしなが、博物館活動の中に、開かれた参加・体験志向の展開をしていくことが求められていくと予想されます。また、高齢者、障害者のための施設・設備の改善も必要となってきます。地域性や館の持ち味を生かしつつ、時代の要請に応えなければならぬと思ひます。

一方、学校教育では、教育課程の改訂に伴い、小・中学校、高等学校とも「総合的な学習の時間」が設定され、学校裁量の幅が大きく増えました。小・中学校では博物館、郷土資料館、科学学習センターの活用など、高等学校では身近な地域の課題についての学習活動などを行うものとされています。また、平成14年度から完全学校週五日制の実施によって子供達の自由な時間が増え、魅力ある展示や催しによって博物館を利用する機会も増えると思われまます。

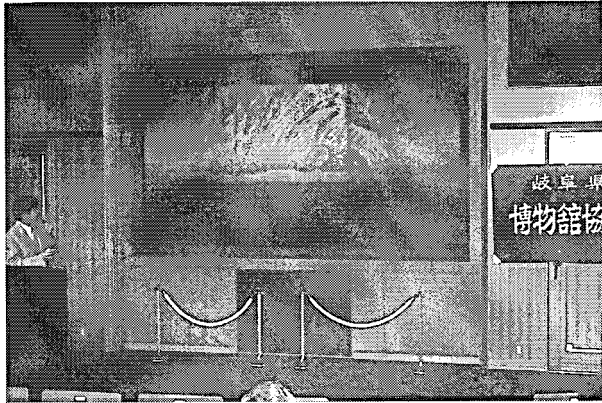
これからは、学校と博物館、地域と博物館の連携をさらに密にして、それぞれの博物館の持ち味を生かしなが、地域文化の向上に努めていかなければなりません。生涯教育の場として、博物館の役割はますます重要になってきております。

「飛騨地区の文化財紹介」

期日：平成11年6月13日（日） 13:30～15:30

場所：岐阜県博物館ハイビジョンホール、特別展示室

講師：岐阜県博物館学芸員 岩佐伸一氏 参加：42名



「近世の飛騨における芸術分野」では市川鳳頂や山岡鉄舟についても話をされました。飛騨というと遠隔地であり、雪が多く少し暗いイメージが私自身ありました。しかし、今回の講演を聞いたり展示を見たりして、厳しい環境を乗り越えた人々の生き様や広い視野をもって活気に満ちた行動をした飛騨の人々の心意気に心打たれました。

(機関紙委員 岐阜県博物館 井上好章)

まず、「飛騨」の由来から話が始まりました。飛騨の由来には3つあるということでした。一つ目は、山が多く巒（ひだ）状になっていることから、二つ目は、飛ぶがごとく走るよい馬を産出したことで飛馬から、三つ目は、都から見れば鄙（ひな）びていることからだそうです。いずれにせよ、飛騨地区の特徴をうまく表現したものです。

その後、「古代から江戸時代までの飛騨」を古代、中世、近世、近世後期と分けて大まかな歴史の流れを話されました。他の地域と比べて大原騒動、安永騒動、天明騒動などの一揆が多くあったことが、この飛騨地区の特色となっているとのことでした。

次はいよいよ本題の「江戸時代の飛騨」ということで、「飛騨の街道と人々」と「近世飛騨における芸術分野から」という2面に分けて話をされました。

その中でも非常に興味深かったのは「飛騨の街道と人々」において、二本木俊恭、大森旭亭、力士：白真弓肥太右衛門、加藤素毛らのそれぞれの履歴書を作成してその人その人の生き様に迫りながら、非常にわかりやすく話をされたことです。

履歴書

明治元年11月9日没



(ふりがな)	しらまゆみ	ひだ えもん
氏名	白真弓 肥太右衛門	
生年月日	文政12年(1829)	没年齢40歳
現住所	江戸	
出生地	飛騨国大野郡白川郷木谷村	
参考事項	私の生まれる前の年にいわゆるシーボルト事件がおこりました。	

和暦(西暦)	学歴・職歴・その他の事項
天保2年(1831)頃	高山へ祭り見物に出たまま高山の醤油屋で働く。
嘉永6年(1853)	江戸に出て力士となる。
安政元年(1854)	黒船来航に際して、アメリカ人と力比べをする。
同年	幕内に入る。
安政4年(1857)	白真弓が中心となり相撲の高山場所を開く。

<得意なもの> 米俵や硝石入りの包みを運ぶこと。	<自慢> 前頭筆頭になったこと。
<幕内成績> 幕内在位30場所。 58勝123敗17分5預。	<性格など> 温厚
<健康状態など> 晩年病みがちながらも力はおとろえず。	<体重・身長など> 体重40貫(約150kg) 身長6尺8寸6分(約208cm)

家	氏名	性	その他参考事項
族	木谷村の勇作	男	父。

第43回岐阜県博物館協会会員研修会報告

「桃山から江戸初期の美濃窯について」・「地方文化」

日時 平成11年6月11日(金) 13:30~16:10

場所 岐阜県陶磁資料館

講師 美濃古窯研究会代表 今井静夫氏 ・ (社)美濃陶芸協会長 七代 加藤幸兵衛氏

第43回会員研修会が岐阜県陶磁資料館で開催されました。今回の研修会は岐阜県陶磁資料館友の会との共催で行われ、会場には当協会会員のほか、友の会のみなさんも多数参加して下さいました。

まず、今井静夫氏に「桃山から江戸初期の美濃窯について」という演題で講演していただきました。講師の今井先生は、長年美濃古窯を研究されており、数多くの窯跡の発掘調査も手がけられています。今回は1300年もの美濃焼の歴史のなかで、最も華やかな時代、桃山時代の美濃窯について話されました。約400年の時代を経て、今なお私たちに魅了してやまない黄瀬戸、瀬戸黒、志野、そして織部の美濃桃山陶。講演ではこれらの焼き物を伝世している名品から窯跡出土の陶片まで多くのスライドを用いて紹介されました。茶の湯の道具として用いられた茶碗が端正な半筒形から作為溢れた杢形に変化する様子、時とともに変化する焼き物の意匠や製作技法、より効率的な窯業生産を目指して大窯から連房式登窯へ窯構造が変化したことなどを説明されました。地元で根付いた研究活動をされてきた今井先生ならではの講演で、桃山時代から江戸時代初期という短い時間でありながら、当時の消費者の要求を的確に捉え、その需要に応えようと次々に新しい焼き物を生み出してきた美濃の陶工達の姿が目浮かぶようでした。

続いて、加藤幸兵衛氏に「地方文化」とい

う演題で講演していただきました。加藤先生は陶芸家としてご活躍され、また美濃陶芸協会の会長も務められています。現在の美濃陶芸協会は会員数100名を超え、それぞれが様々な陶芸分野で活動しており、一言では語りきれないほど美濃の陶芸は多様であるとのことでした。先生は「それぞれの地域にはそれぞれの伝統文化があり、お互いにそれを尊重し合うことが大切である」と述べられました。また、哲学者である和辻哲郎の言葉を引用され、「その土地の気候や風土は、そこで育った人間の価値観、考え方に影響を与える」と話されました。そして、地球上には様々な文化が存在しており、異なる文化に接する際に他の文化の尺度や価値観でその文化を評価すべきでないことや自分自身の文化をしっかりと認識し、お互いを尊重し合うことが真の国際化であることが述べられました。さらに、「この地方には長い歴史によって築かれた『美濃の文化』があり、その文化を他へ押しつけぬように、他から押しつけられぬようにして、自分たちの地方文化を大切にしよう」と述べられました。このほか、西洋の三大珍味に対抗し、美濃の三大珍味を設定して食文化を語られるなど、ユーモア溢れる先生の講演に参加者一同聞き入っていました。

講演後は岐阜県陶磁資料館で開催中の特別展「美濃の陶祖 第十二代加藤景秋・第十三代加藤清三回顧展」を見学し、散会しました。

(機関紙委員 土岐市美濃陶磁歴史館 加藤真司)

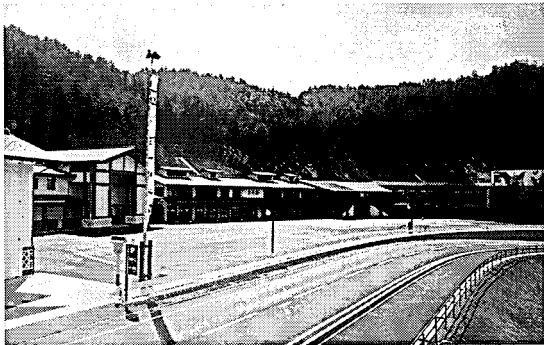


飛騨高山まつりの森

高山祭りミュージアム
ちょうの館

〒506-0032 高山市千島町1111
TEL 0577-37-1000

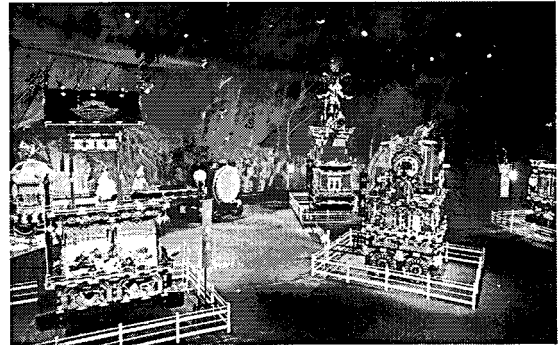
飛騨高山まつりの森は飛騨の伝統的な文化・工芸・美術、そして豊かな自然をテーマとした総合施設として平成10年4月29日にオープンしました。祭をテーマにした「高山祭りミュージアム」、自然をテーマにした「ちょうの館」が現在開館しており、さらに、今秋には、茶道宗和流に代表される高山の茶道文化と美術を紹介する「茶の湯美術館」が開館します。また、関連施設として全国各地から来館されるお客様に飛騨の味覚を提供するレストラン「食祭館」や、緑日感覚で民芸品やお土産を購入できる「お祭り市場」などがあり、1年中いつでも飛騨高山の魅力を満喫できる施設としてご好評いただいております。



【高山祭りミュージアム】

日本で初めての地中空間を利用したミュージアムには、現代の名工達の最高の技術を集めて約150年ぶりに建造された平成屋台6台が展示され、このうち4台の屋台の人形からくりが約10分間隔で上演され、一年中いつでも絢爛豪華な祭り屋台とからくりの妙技をご覧いただけます。その他、高山独特の八角形をした重さ3tの大神輿や、直径3mの大木をくり抜いて造られた世界一の大太鼓などが展示されています。また、エントランスホールから地中ドームに至るアプローチ・トンネルには、精巧に造られた秋の高山祭りの屋台11台の3分の1・レプリカや、全国の重要有形・

無形民俗文化財に指定されている祭りを金やプラチナ、玉虫貝などをふんだんに使い輪島塗の技術の粋を集めて制作された金蒔絵屏風などを展示し、来館者の方に祭り文化を間近に見て感じていただくことのできる展示を心掛けています。このほか、社会教育活動として年数回、市民参加型のイベントなどを行い、地域の方々にも親しまれています。



【ちょうの館】

自然をテーマにした「ちょうの館」の館内には、世界各国で採集された蝶をはじめとする昆虫標本約7千種・4万匹を展示しており、オーベルチュールオオツノハナムグリやアレキサンドラトリバネアゲハなどの稀少種も見る事ができます。また、屋上から裏手の丘陵を利用した自然観察遊歩道には各種の蝶の食草となる草木をはじめ、数百種類の山野草が茂り、四季折々の自然を楽しめます。ここでは季節ごとの自然観察会などをおして自然との触れ合いの場となるよう心掛けております。また、研究活動としてギフチョウの増殖にも取り組んでいます。



【ご案内】

交通 JR高山駅から濃飛バス・まつりの森行き乗車 (所要時間15~25分)
開館 年中無休 午前9時~午後5時
(飛騨高山まつりの森 学芸員補 糸田尚)

R100

古紙配合率100%再生紙を使用しています。